

平成 27 年 5 月 1 日

京口門だより No. 19

何か肌寒い春がすぎて、いきなり夏が訪れたような今年の初夏です。野山の草木の緑はいきいきとしたのちの輝きを見せています。開放的な雰囲気誘われて、散歩や外出をしたくなります。

それとはうらはらに気分がめいり、不安やいら立ちをつのらせる人もいます。ちょうど就職や新生活に入って1か月くらいが不安定な気分におちいりやすくなります。五月病などともいわれますが、軽症うつ病や不安障害であることが多いと言われます。気がめいる、楽しくないといった抑うつ気分、無気力やおっくうで何ごとにも意欲が低下したり、考えがうかばず、決断できないというような心の状態になります。身体のうえでも、眠れない、疲れやすい、頭が重かったり、痛んだりする、肩がこったり、腰が痛い、食欲がないなどの症状が出てきます。このようなうつ症状はなぜ起こってくるのか、ある昔の名漢方医は次のように説明しています。一つは高望みをして心になかなかつかなかった時に起こる、またあれこれと思ひめぐらすことが多いと、ものごとが決められなくなり起こる、あるいはさまざま不幸な目にあって、失意することから起こる、あるいは裕福な生活をしていたのが、財産を失って貧困になった時、そして病気や老化によって身体が弱ってくると起こりやすい、というのです。現代社会はもっと複雑になり、ほかにも色々な原因が考えられそうですが、名漢方医の説明も納得できます。

ではどうすればこの軽症うつ病を治すのか、現代の抗うつ剤を飲めばよいと言えそうですが、なかなかそう簡単にはゆかないことも多いものです。ある三十代半ばの体格のよい男性会社員でしたが、会社での大事な契約を任せられたのはいいのですが、失敗をしてしまい、気分がふさぎ、だるい、眠れない、イライラ、尿に何度もゆきたくなる、急に汗が出たり、手がふるえたり、耳鳴りもしてくるといった症状が出てきました。病院で抗うつ剤、抗不安薬、睡眠薬など処方されましたが、自分では一向に治ってゆく気がしない、と訴えます。そこである漢方薬を飲んでもらいましたら、十日目にはやや症状がかるくなり、半年の服薬で、西洋薬も止め、すっかり良くなった人がいました。漢方薬をこのように用いることがあります。

